

土屋文明編「子規歌集」岩波文庫、岩波書店 1959年1月5日刊を読む

明治十五年

壬午しんごの夏みなみ三並うしの都にゆくを送りて

隅田すみだがはつみ川堤の桜さくころよ花のにしきをきて帰らん

P11

明治十九年

中禅ちゅうぜんじこ寺湖

いく坂をのぼりのぼりて尋ねきし山の上にもうみを見るかな

P12

明治三十四年

墨汁一滴 五月九日

下総しもふさの結城ゆふきの里ゆ送り来し春この鶉うづらをくはん齒もがも

菅すがの根の永ひとひき一日いひを飯も食はず知る人も来こずくらしかねつも

根岸に移りてこのかた、殊ことに病とこの牀にうち臥して
 このかた、年々春の暮より夏にかけて、ほととぎ
 すといふ者の声しばしば聞きたり。しかるに今年
 はいかにしけん、夏も立ちけるにまだおとづれず。
 剥製はくせいのほととぎすに向ひて我が思ふところを述ぶ。
 此の剥製の鳥といふは、何がしの君が自ら鷹狩に
 行きて、鷹に取らせたるを、我がためにか斯く製し
 て贈られたるものぞ

竜岡たつをかに家居る人はほととぎす聞きつといふに我は聞かぬに

ほととぎす今年ことしは聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつるかも

逆剥さかはぎに剥はぎてつくれるほととぎす生けるが如しひとこゑ一声もがも

うつ抜きに抜きてつくれるほととぎす見ればいつくし声は鳴かねど

ほととぎすつくれる鳥は目に飽けどまことの声は耳に飽かぬかも

置物とつくれる鳥は此の里に昔鳴きけんほととぎすかも

ほととぎす声も聞かぬは来馴^{きな}れたる上野の松につかずなりけん
我^{われ}病みていの寐^ねらえぬにほととぎす鳴きて過ぎぬか声遠くとも
ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほととぎす
ほととぎす鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり

P106 ~ 107

[コメント]

2010年1月1日から5日までの書き抜き読書ノートは、正岡子規晩年の四大随筆集と「子規歌集」の5冊。俳句の世界に身を投じ、俳人としての生き方を選んだ子規は、35歳という短い生涯であったが、よく生きたと思う。ほととぎすは漢字で書くと子規。趣深い生き方であったと考える。

- 2010年1月5日 林明夫記 -